

それから岡崎の警察へ運ばれて、翌朝お粥を拵へてくれた。

幾らか好くなつたので、又汽車に乗る。

名古屋も彦根も過ぎて京都からは、五六人の軍人らしくもないのが、ドヤ／＼と俺の居る客車へ這入つて来た。

「此の分なら大丈夫だ」とか言つて、歌を唄つたりしてゐた。

大阪へ着いた時俺は開札口のネサへへたばつてゐると軍人の一人が俺の置き忘れた敷島か何かを持つて来た。

俺は十分間ばかりあぐらをかいて休んでゐたが、思ひきつて柵を出て人力車に乗つた。

雨が降り出してゐた。

自動車が俺を迎ひに来てゐた様だつたが、

「うまくやつてゐやがら」

とか刑事が言つたやうだつた。

俺は姉の家へ俵を命じた。